

推敲の果て、今私達を知る事の出来るその変遷の最後の形において、「銀河鉄道の夜」は客観性を有し、自己統一の一応の成果によって作品は、賢治から離れかけているのである。ここにおいては、もはや作品中の賢治の生涯・思想の影は賢治固有の経験ではなく、客観的経験となる。賢治個人の遍歴が、一般の人間の普遍的生涯の一部を示しているのである。「銀河鉄道の夜」は、その宇宙的広がりのように、いよいよ無限の魅力を湛えていくのである。

「あいなし」についての考察

——源氏物語を中心として——

二十八回生 汐崎町子

注 釈

注 1 「農民芸術概論綱要」・農民芸術の産者より

注 2 「注文の多い料理店」角川文庫（昭50・11・30）中

「新しい古典復刻の弁」（小倉豊文氏）より

注 3 田村芳朗著「法華経―真理・生命・実践」中公新書

196（昭52・8・5）より

注 4 妹トシの死（大正11年）の後、知人等に名無しで配

布された手紙。兄のチュンセが死んだ妹のポーセを

探し求めるという、賢治とトシを思わせる兄妹の話

が書かれてある。

目 次

序 本論

第一章「あいなし」についての概説

第1節 古辞書、古注における「あいなし」

第2節 「あいなし」の語源

第二章 源氏物語における「あいなし」

第1節 『源氏物語』の「あいなし」と他作品の「あい

なし」について

第2節 「あいなし」の意味

- 第1項 「あいな頼み」
- 第2項 心情語としての「あいなし」
- 第3項 心情語以外の「あいなし」
- 第3節 「あいなし」と「あちきなし」

結 び

補 注

参 考 文 献

（但し、本稿では、第一章を、一「あいなし」の語源などとしてまとめた。第二章では、第2節第2項、第3項を中心に論じた。）

一、「あいなし」の語源など

『源氏物語』の注釈書、『湖月抄』には、「あいなし」について、「あぢきなき心也、愛なき也」とある。『河海抄』、『岷江入楚』も、大体同じような注が付してある。

『玉の小櫛』には、「此詞數もなく多く有、そをことごとく見わたし合せてかむかふるに、何といふわきまへもなしにうちつけに物すること也、こゝもその意にて、おのが身にかゝらぬ人までも、何といふことなしに目をそばむる也、注に無愛也、あぢきなく也などいへる皆かなはず」とある。「あいなし」は古辞書にはない語であり、語源も未詳である。前にあげた古注をみると、一方は、「愛無し」、「あぢきなし」などを、その意味と考えており、もう一方は、それを完全に否定している。一体、どちらが正しいのであろうか。

ここで、文学作品とのかかわりにおいて、歴史的に、「あいなし」の使われ方をみてみよう。表一は、それぞれの作品における「あいなし」の使用度数を示したものである。この表より、「あいなし」の特徴の一つである使われる時代が限られているという事実が明らかになる。「あいなし」は、九〇〇年代後半、『蜻蛉日記』、『宇津保物語』からみえ始めており、それ以前の作品には、全く用例が見当たらない。そして、ここにあげた中古文学のほとんどの作品に、「あいなし」の用例がみられる。なかでも、散文では、『大鏡』を除いたすべての作品に、この語が使われている。それとは対称的に、韻文には、中古を含むどの時

代にも一例も見当たらない。また、『源氏物語』の一〇五例を最頂に、『夜の寝覚』に三四例、『浜松中納言物語』に一三例、そして『とりかへばや物語』に一七例用いられているが、その後はほとんど見られなくなる。『方丈記』、『平家物語』などの中世の作品には用いられておらず、わずかに、『徒然草』、『増鏡』に五、六例使われているのみである。この二作品は、いずれも擬古文の性格が強いことから、「あいなし」は中古文学独特の語と言えるのである。

② 汝が目ノ極メテ愛无ク醜キニ抜キ代ヘムト云フ(注1)
語(一)三〇五頁三行)

③ 継母なりし人、下りし國の名を宮にもいはるゝに、異人に通はして後も猶その名いはるときとて、親の今はあいなきよし、いひやらむとあるに

朝倉やいまは雲井に聞く物を、猶木のまろが名のりをやする(更級日記五〇三頁六行)

④は、『今昔物語第四卷』にみられるものであるが、ここでは、「愛无シ」という表記である。ところが、⑤の『更級日記』の例を考えてみると、この場合、「合無し」が適当と考えられる。筆者の継母が孝標と別れ、今は宮仕えをしているが、孝標が、以前、上総介だった時、継母も一緒に下っていたことから、宮中でまで上総大輔と呼ばれている。「今さらそういう名を使うのは似合わないから、そういう方がよい」という意味であるようだ。

⑥かからぬ年だに、御覽の日の童の心地どもは、おろかな

〔表Ⅰ〕 文学作品にみる「あいなし」

西 暦	作 品	使用度数	西 暦	作 品	使用度数
712	古 事 記	0		明 恵 上 人 歌 集	0
720	日 本 書 紀			千 載 集	0
	万 葉 集	0		今 昔 物 語	1
	竹 取 物 語	0		山 家 集	0
900	管 家 文 草	0		堤 中 納 言 物 語	4
	管 家 後 集	0		とりかへばや物語	17
905	古 今 集	0		無 名 草 子	1
	伊 勢 物 語	0		松 浦 宮 物 語	2
935	土 佐 日 記	0		新 古 今 集	0
	伊 勢 集	0	1212	方 丈 記	0
951	後 撰 集	0	1216	宇 治 拾 遺 物 語	0
950頃	大 和 物 語	0		海 道 記	0
	平 中 物 語	0		閑 居 友	0
	蜻 蛉 日 記	8		建礼門院右京大夫集	2
	宇 津 保 物 語	13	1242	東 関 紀 行	0
	落 窪 物 語	10		平 家 物 語	0
	多 武 峯 少 将 物 語	1		な よ 竹 物 語	0
	枕 草 子	9		十 六 夜 日 記	0
1002頃	源 氏 物 語	105		う た た ね の 記	0
	紫 式 部 日 記	4	1330頃	徒 然 草	6
	和 泉 式 部 日 記	2		増 鏡	5
	狭 衣 物 語	1		篁 物 語	0
	浜 松 中 納 言 物 語	13	1518	閑 吟 集	0
	夜 の 寝 覚	34		きのふはけふの物語	0
1060	更 級 日 記	2	1683	雑 兵 物 語	0
	栄 華 物 語	用例あり	1685	野 ざ ら し 紀 行	0
	大 鏡	0	1688	更 科 紀 行 ・ 笈 の 小 文	0
1142	極 楽 願 往 生 歌 集	0	1694	奥 の 細 道	0
1144	詞 花 集	0	1871~ 1872	安 愚 楽 鍋	0

らざるものを、ましていかならんなど、心もとなくゆかしきに、歩み並びつゝ、出で来たるは、あいなく胸つぶれていとほしくこそあれ。さるは、とりわきて深う心よすべきあたりもなしかし。(紫式部日記四七九頁一〇行)

◎は、五節の舞姫に従う童女たちを、帝が御覧になる、御覧の儀のことである。そこにずらりと並んだ童女達、皆、優劣つけ難い美しさである。他にひけをとらない美しさを誇っていたとしても、若い男性も混じった多くの人々にまじまじと見られる気持ちを察すると、筆者は、「胸つぶれていとほしく」思われるのである。ところが、「とりわきて深う心よすべき云々」でわかるように、筆者が特別にひいきにしている者がいるわけではないのである。この場合の「あいなく」は、「理屈に合わないこと」というような意味と考えられ、⑤と同様、「合無し」ではないかと考えられる。

「あいなし」は、②のように、確かに「愛無し」の意味で使われることもあるが、⑥、⑦のように、「合無し」とされるものが非常に多い。「愛無し」であれば、その語の意味はおよそ見当がつく。「いやな」とか、「おもしろくない」とか、不快な感情がそこに読み取られる。それに対して、「合無し」は、直接に感情を表わすものではない。ある基準に照らして、合わないという事実が示されるのである。ただし、合わない、似合わないと感じることは、不満な感情へと発展しやすい。⑥の場合、「あいなき」は、孝標の不満とする気持ちを表わすと考えれば、「愛無し」

の意味に非常に近づいてくる。このことから、「合無し」が、「愛無し」と混同されたということが考えられる。時代がたつにつれて、文学の担い手も変化したために、『更級日記』の時代には「合無し」であったものが、『今昔物語』や『湖月抄』の時代には、「愛無し」へと意味が転化してしまったことも考えられることである。

二、源氏物語における「あいなし」

『源氏物語』には、表Ⅱに示すとおり、一〇五例の「あいなし」が見られる。ここでは、「あいなき頼み(頼め)」を除いた一〇一例についてその意味を考察する。

まず表Ⅲより、『源氏物語』の中では、宿木の巻に、「あいなし」が最も多く使われていることがわかるが、これも、「あいなし」の意味とかわわっているだろう。

ところで、一章において、「あいなし」は「合無し」であろうと述べたが、『源氏物語』においても、まず、

(1) 似つかわしくない。不都合だ。

という意味が読み取られる。

それは、②「…かく心やすき御住まひは、ただいとうちとけたるさまに、ふくみ萎えたるこそよけれ。うはべばかりつくろひたる御装ひはあいなくなむ」(初音③一四八頁一〇行)によって代表される。末摘花の服が寒々としているのを、気がねのいらぬ住まいでは、ふつくらと萎えているのがよいのに、それは似合わないと源氏が言っているのである。他に、⑥限りなき御おぼえの、あまりもの騒が

〔表Ⅱ〕 活用形別にみる「あいなし」

()内は%

活用	語幹	未然	連用			終止	連体		已然	あいな頼み	
総数	あいな	から	く	う	かり	し	き	かる	けれ	頼み	頼め
105	2(2)	1(1)	39(37)	14(13)	2(2)	14(13)	17(16)	1(1)	2(2)	3(3)	1(1)

〔表Ⅲ〕 巻別の「あいなし」

105例

松風 1	絵合 0	関屋 1	蓬生 0	澤標 3	明石 4	須磨 2	花散里 1	賢木 7	葵 1	花宴 0	紅葉賀 1	末摘花 2	若紫 2	夕顔 4	空蟬 0	帚木 1	桐壺 1
柏木 1	若菜下 2	若菜上 5	藤裏葉 2	梅枝 1	真木柱 3	藤袴 0	行幸 1	野分 0	篝火 0	常夏 1	螢 1	胡蝶 0	初音 1	玉鬘 0	少女 5	朝顔 1	薄雲 0
夢浮橋 1	手習 2	蜻蛉 4	浮舟 0	東屋 4	宿木 15	早蕨 4	総角 6	椎本 0	橋姫 3	竹河 2	紅梅 0	匂宮 0	幻 1	御法 1	夕霧 7	鈴虫 0	横笛 0

しきまで暇なげに見えたまひしを、通ひたまひし所どころも、かたがたに絶えたまふことどもあり、軽々しき御忍び歩きもあいなう思しなりて、ことにしたまはねば、いとのどやかに、今しもあらまほしき御ありさまなり。(賢木 ⑨九五頁九行) などがある。これは桐壺院の崩御によつて世の中が一転し、不遇せられている時のことである。源氏もこの経験によつて成長もしたのである。以前のような軽々しい忍び歩きを、似つかわしくないと思い始めている。次に、②不満だ・不本意だ。という意味が考えられる。例えば、②を取ってみても、似つかわしくないと思うことは、不満だという側面を持っている。また、⑥は、似つかわしくないと自らが感じているから、そうすることを、不本意だと思ふ気持ちだが、当然、そこに存在する。次にあげるものが②に相当する。

◎大将の、をかしやかにわららかなる気もなき人にそひるたらむに、はかなき戯れ言もつましうあいなく思されて：(真木柱 ③三八二頁三行)

①御文は忍び忍びにありけり。身をうきものに思ひしみたまひて、かやうのすさび言もあいなく思しければ、心とけたる御答へも聞こえたまはず(真木柱 ③三八四頁一三行)

玉鬘は、もはや、髭黒大将の妻である。その上、彼は冗談のわからない堅物だから、戯れ言やすさびごとを言つて遣るのは不都合である。源氏にとつて、あえてそうするのは不本意であるし、玉鬘にとつては、迷惑な、不満なこと

であるはずだ。

さらに、心情的な性質が強まったと考えられるものに、
㉔「わが思ふ方は異なるに譲らるさまもあいなくて」
(総角㉔二九二頁一三行)、㉕「この大臣に怨ぜられはて
んもあいなからん(宿木㉕三七二頁一一行)㉖冬の御方に
も、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれんもあいなし
と思して(梅枝㉖四〇一頁九行)などがある。

㉗は、大君を愛しているのに、中の君を勧められて、不
満、不本意とする薫の心境。㉘は匂宮の心情で、夕霧に恨
まれるのは不本意だというもの。㉙は、明石の君が、薫物
合わせで、他の人に負けるのは、不本意だ、悔やしいと思
っているという気持ちである。他に、薫の㉚「あいなしや
わが心よ。」(宿木三三七頁一四行)のように、嘆きに近
い心情も、不本意な気持ちの募っていったものとみてよい
だろう。

さらに、人目を「あいなく」思っている例が三例ある。
根柢のないことを勝手に想像したり、事実を誇張して話し
たがる口さがなさに、不満を抱いていると見るべきである
う。

第三に、不本意だと思ふ気持ちの裏に、他の人に対する
配慮がみられるものがある。

(3) 気の毒だ。かわいそうだ。

㉛「つひにあるべき事の、かく隔たりて過ぐしたまふを、
かの人もものしと思ひ嘆かるらむ。この御心にも、今は
やうやうおぼつかなくあはれに思し知るらん。方々心お

かれたてまつらむもあいなし。」(藤裏葉㉛四四一頁一行)
紫の上が、明石の君と娘が離れ離れに暮らしていること
を、親子は一緒に暮らすのが当然なのに、気軽に会うこと
もできないのは、不似合いであると思っている。㉜の場合、
明石の母子は、会えなくて不満なのであり、つらいと思っ
ているだろう。その気持ちを思いやる紫の上は、気の毒だ
と思っているに違いない。さらに、今の状態を続けること
には、不満があり、不本意なのである。

親子の間のことをいったものでは、他に、内大臣(頭中
将)が、娘を後の親に譲ることを「あいなし」と言ってい
る例がある。また、源氏が、八の宮の勤行の邪魔をしてま
で対面するのは、「あいなし」とする例も、八の宮に対し
ては気の毒で、源氏にとっては不本意なのであろう。また
紫の上が女三の宮との対面を希望しているのに、会わせな
いのは「あいなし」と、源氏が思っているものも、気の毒
というのではないにしても、相手に対する思いやり、配慮
が含まれているという点で同じだと考えてよいだろう。

最後にもう一つ、次のことが考えられる。

(4) 無駄だ

これも、(1)の「似つかわしくない。不都合だ。」という
意味と表裏の関係である。

㉝「かばかりのすくよけ心に思ひそめてんこと、諫めむに
かなはじ。用ゐざらむものから我さかしに言出でむもあ
いなし。」(夕霧㉝四四四頁八行)

落葉の宮のことで、夕霧を諫めたとしても、一途な性格の

人であるから、耳を貸さないであらうと源氏は考える。それなら、しても無駄であり、せぬがましであるという考えであるらしい。

同じような意味で、夕霧が落葉の宮を口説いても、彼女は靡かない。これ以上やっても無駄だというものがある。

㊦「あいなかりける心くらべどもかな」（夕顔㊦二五八頁八行）

源氏と夕顔は、お互いに、相手が素姓を明かさないので、自分に対する愛情がそれほど深くないからだと思ひ悲しんでいた。そのうちに、夕顔は死んでしまい、源氏は初めて真相を知る。㊦の「あいなかりける」は、なんと、つまらぬ意地を張り合つたことか、そうしなければよかつた、無駄だつたという意味である。他に、中将の君が、常陸介に浮舟の事情を打ち明ける場面に使われているものがある。浮舟が、薫に正式に迎え取られてから話すつもりであつたのが、浮舟が死んで（失踪して）しまつては、隠すのは無駄なことだという意味に使われている。また、横川の僧都が、薫に浮舟のことを隠しだてすることを「あいなし」としている例も、薫は真実を知っているようだから、無駄で、かえつて不都合だという意味にとれる。

以上のように、「あいなし」の意味について考察したが、結論として次のことが言える。

まず、「あいなし」の第一義は、(1)似つかわしくない。不都合だ。ということである。それから派生として、(4)無駄だ。という意味を持つこともある。また、「似つかわし

くない不都合な」立場の人に対して、(3)気の毒だ。という気持ちを表わす場合もある。しかし、最も多く使われているのは、「似つかわしくない、不都合な」ことに、(2)不満だ。不本意だ。という気持ちを表現するものである。

ところで、次にあげる例は、(1) (4)の「あいなし」の意味では、一見、解決がつかないようにみられるものである。①「これは、女のなつかしきまにてしどけなう弾きたる

こそをかしけれ」と、おほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑みて：（明石㊦三三二頁一行）

娘をぜひ源氏に、と前々からの心積りだつた明石の入道が、源氏が「琵琶は女が弾くのがよい」と、一般論として言つたのに、「しめた」と喜ぶ気持ちから、つい、顔をほころばせる。「あいなく」は、その「うち笑みて」にかかつている。この「あいなく」を、入道の心情を表わす語であると考えるならば、「うち笑みて」に矛盾する。

㊦：常に召しありて、源氏の君は参りたまふ。世の中のことなども、隔てなくのたまはせつつ、御本意のやうなれば、おほかたの世の人もあいなくうれしきことによるこびきこえける（澤標㊦二七〇頁三行）

源氏が、再び京へ召還され、帝と睦まじく語り合つている。それを、「うれしきことによるこびきこえける」世の人が、同時に、(1) (4)の気持ちでいるとは考えられない。この①㊦の問題は、「あいなし」の主体を入道、世の人とするために起こるものである。この場合、主体は作者であるとなれば、(1) (4)の意味で理解できる。『源氏物語』には、こ

のように、作者や話者が、ある人物について述べながら、自分の客観的な意見を挿入するのに用いた「あいなし」が多く見られる。連用形の「あいなく」、「あいなう」の独特のものであり、「あいなし」の総用例一〇一例中、三六例である。この場合の意味も、根本において、前にあげた(1)と(4)と考えてよい。第三者からみると、似つかわしくない、不満だ。「(第三者から見ると)そうする(なる)必然性がないのに」ということになる。

⑨さて、またの日の夕つ方ぞ渡りたまへる。人知れず思ふ心しそひたれば、あいなく心づかひいたくせられて、なよよかなる御衣どもを、いとど匂はしそへたまへるは、あまりおどろおどろしきまであるに、丁子染の扇のもてなしたまへる移り香などさへ、たとへん方なくめでたし(宿木④四一二頁二行)

⑩このほどまでは漂ふなるを、いづれの道に定まりて赴くらんと、思ほしやりつつ、念誦をいとあはれにしたまふ頭中將を見たまふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つありさま聞かせまほしけれど、かごとくに怖ぢてうち出でたまはず。(夕顔①二六六頁一四行)

薫は中の君に対して、次第に恋愛感情を抱くようになり、彼女に会うために、「心づかひいたくせられ」る。しかし、薫が粧し込むことは、客観的に、突き放した見方をすると、必然性のないことである。⑩は、さらに場面が緊迫している。夕顔の死後、彼女と縁の深い頭中將を見て、源氏は胸が騒ぐ。これも⑨と同様、さめた見方をすれば、必然性の

ないことなのである。他に、藤壺が帝に源氏の舞った青海波の感想を求められた時の、「あいなう、御答へ聞こえにくくて」の例、空蟬と契った後に、夫の伊予介と対面して彼を「あいなくまばゆくて」とするものなど、すべて、興味をそそる場面である。

これらの場合、「(第三者から見ると)そうする必然性がないのに」ということばの裏には、そうせずにはいられない、当事者の強い心の動きが見られる。「あいなく」という、実に冷静な表現であるのに、その場面はしばしば緊迫している。源氏のすばらしい青海波にみとれながらも、彼との不倫の恋に煩悶する藤壺、夕顔の死んだ悲しみと、頭中將に対する良心の痛みとが交錯する源氏の心情は、いくらことばを重ねても、書きつくせるものではない。そこに、「あいなく」を持ってきているのである。作者が、登場人物と同化して、感情に走るのでなく、あくまで、語り手として理性を保っている、心にくい表現と解釈できるのである。

結び

『源氏物語』を中心として、「あいなし」について考察した結果、次のことが得られた。

「あいなし」の意味の中心となるのは、「ある基準に照らしてみても、合わない」ということである。そして、「合わない」と感じるものが、「不満だ」、「不本意だ」、

「気の毒だ」という心情へと、しばしば発展している。場面、状況によって、この一語から読み取られる心情は違ってくる。多義性と曖昧さを備えた語とも言える。また、婉曲表現を好んだ、平安の女流文学に、「あいなし」が多く用いられているが、「あいなし」の多義性曖昧さが、婉曲性と結びついた結果であると言えないだろうか。

補注

注(1) 『源氏物語』は、日本文学全集(小学館)に拠る。

その他の作品は、すべて、日本古典文学大系(岩波書店)に拠る。

熊本県鹿本郡植木町の方言研究

二十八回生

高木ちか子

目次

序論

第一章 植木町の方言文法―動詞―

第二章 植木町方言調査による特徴的な語の分布と概観

結び

序論

人々は地域社会において、いかなる言語生活を営んでいるのだろうか。年齢・性別・職業等の違いが実際の言語生活に与える影響に着眼して、ここでは筆者の出身地であり、熊本方言の中核でもある鹿本郡植木町を調査地点に選び、

参考文献

『源氏物語語義の研究』 山崎良幸(風間書房)

『平安女流文学のことは』 木之下正雄(至文堂)

『源氏物語におけるあいなし』についで

行本とよ子(国語学論説資料第一三号第四冊)

『源氏物語における「あいなし」考』

河島知子(四三年度熊本女子大学卒業論文)

植木町における言語生活の実状を明らかにする。と同時に熊本方言全般にわたって現状を克明にしたいと思ひ、ここに植木町の方言をとりあげたのである。

第一章 植木町の方言文法―動詞―

動詞の活用

活用形の名称はなるべく教科文典のそれと関係づける様心がけた。

形態上差があるため、未然形を否定形と将来形に分ち、形態上差がないところから終止形に連体形を含め、ある程度話し言葉に合わせた。